

同窓会

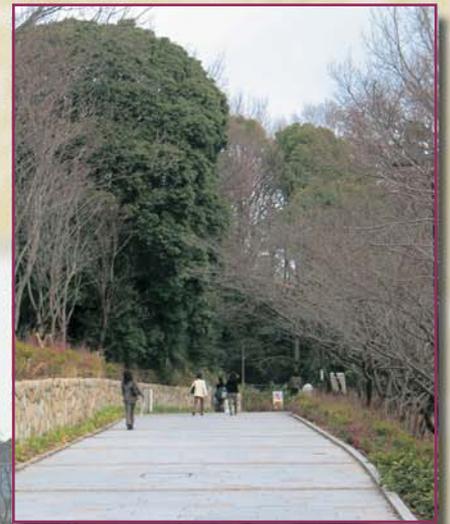
# ニュース・レター

第6号

大阪大学  
文学部  
文学研究科  
同窓会

2007年3月20日発行

右手に中山池を望む遊歩道



日本庭園の大ケヤキ

## 阪大坂のリニューアル

リニューアルなった阪大坂。坂下、旧医短前

〒560-8532 豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部・文学研究科同窓会

URL

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/>

E-mail

[dousou78@let.osaka-u.ac.jp](mailto:dousou78@let.osaka-u.ac.jp)

# ある同窓会

文学研究科長

天野 文雄

昨秋、千里阪急ホテルで催された、工学研究科のマテリアル生産科学専攻の同窓会である溶生会の総会に講師として招かれた。溶生会はもとが工学部溶接工学科の同窓会で、前身は昭和二十年創設の榕樹会、現在は溶接工学科の後身であるマテリアル生産科学専攻の同窓会として活動している。その溶生会に筆者が講師として招かれたのは、工学研究科の豊田研究科長と文学研究科の柏木隆雄先生が昵懇の間柄だった関係で、昨年五月だったか、キタでお二人のほか工学研究科の先生方と会食をとともにさせていただいたことがきっかけだった。会食のうちに、溶生会のもとになった溶接工学科の創始者が第八代総長を務めら



## プロフィール

昭和21年、東京に生まれる。早稲田大学第一法学部、国学院大学文学部卒業、国学院大学文学研究科修了。文学博士。国学院久我山高校、上田女子短期大学を経て、昭和62年、大阪大学文学部に助教として着任。平成18年4月から文学研究科長、文学部長。専門は能楽研究で、著書に、『翁猿楽研究』（平成7年、和泉書院）、『能に憑かれた権力者』（平成9年、講談社）、『現代能楽講義』（平成16年、大阪大学出版会）、『世阿弥がいた場所』（平成19年、ペリかん社）がある。

れた岡田實先生であることを聞いていたから、後日、豊田先生から講演の依頼があったときにも、岡田先生の話を読めばなんとかなるだろうと思って、お引き受けしたのであった。じつは、岡田先生は、喜多流の能謡のたいへんな愛好家で、大阪大学の学生サークル喜多流能楽研究会の年一回の発表会である自演会に、昭和四十年代の後半ころに出演しており、そうした岡田先生の趣味について話してみようと思ったのである（筆者は喜多流能楽研究会の顧問でもある）。溶生会の会員は全員が岡田先生の教え子だということも筆者の意を強くした。こうして、数学や理科がまったくできなかった筆者が工学の専門家ばかりの前で話をす

るといふ、まことに皮肉なめぐりあわせとなったのだが、いざ会場に向いてみると、その雰囲気筆者が漠然とイメージしていた「同窓会」とはかなり様相を異にしていたことに驚かされた。

まず、会場はホテルのもっとも大きなホールであったことに驚いた。学科の同窓会なら、多くて五十人くらいかと踏んでいたのだが、聞けば、その日は百五十人ほどの参加者が予定されているという。その規模もさることながら、さらに驚い

たのは、会場には十ほどの研究室の最新の研究成果や研究状況が大きなパネルで展示されていたことであつた。要するに、そこには、同窓会というものがあつた。あの感傷というものがほとんど感じられなかったの



である。もちろん筆者が知っているのは、役員会総会、講演会、懇親会のうちの講演会だけであり、懇親会などでは、当然、旧交を暖める風景も展開されたことだろう。しかし、少なくとも筆者が接した場の雰囲気は、いわゆる同窓会特有の過去向きの懐旧ではなく、現在あるいは未来をみすえた静かな活気というべきものだった。筆者は、こういう同窓会もあるのかと自分が知ってる同窓会とのちがいに驚きつつ、やがて同窓会はこのころあるべきなのではないかと思つたものである。

そのときの講演は予定の四十分を五分ほど超過して無事終わることができた。会場には岡田實先生のご子息の岡田東一名誉教授も来ておられ、少しくご父君の趣味についての思い出をうかがうこともできた。



# 教え子たちへのメッセージ

## ◆世間知らずのまま

日本史学講座教授  
猪飼 隆明



去る日が近くなつて、そう言えば、この豊中キャンパスの中はもちろん、文学部棟の中ですら、足を運んだところは僅かしかないことに気がついた。玄関横の階段をたった二階分だけ駆け上がった、直ぐそこに日本史研究室があり、その隣が私の部屋である。狭い廊下を挟んで向かい側に会議室がある。何とも便利なロケーションで、教授会の時などは、名札を置いて席を確保し、直ぐ部屋に戻る。ゼミや講義の部屋は、その会議室を右にして、左に回ればそこにある。

この便利さに甘えて、九年を過ぎ、なんと世間知らずだったことかと、この文章を書きはじめて、気がついた。

しかし、世間知らずのまま過ごさせてくれたことへの感謝の気持ちで、いまは一杯である。私の思い通りの研究と教育をさせてもらったと、



振り返ってみて、思う。研究室の先生方や助手のお陰である。

学位授与・大学評価機構の命で、教育評価書を作成するのに幾晩か、遅くまで同僚と額をつきあわせるともあつたが、一体に、会議などに多くの時間を費やすことは、誉められたことではないとの、共通の感情が、この研究科には流れているようで、これは大いに気に入った。

しかし何よりも嬉しいことは、いい学生・院生諸君に出会えたことである。とくに、院ゼミ



猪飼 隆明  
京都大学大学院博士課程退学後、22年間の熊本大学(教養部・文学部)時代を経て、1998年大阪大学に赴任。明治維新・近代天皇制を研究。主著に、『西郷隆盛』・『ハンナ・リデルと回春病院』・『「性の隔離」と隔離政策』など。



は私にとっては至福のひとつときであった。与えられた二片の史料について、一般にその周辺の事情を掻き集めることには概ね習熟している彼等に、その史料そのものからどれだけの情報を引き出させるか、これが私の課題であった。私は、大いに語つたし、彼等も応じてくれた。その後、石橋で呑むビールの味は格別であった。

私のもので、体当たりで卒論を書き社会に出ていった卒業生たちから、いまでも時折便りがある。みな、かけがえない人たちである。

さて、学内をくまなく徘徊してから、去ることにしよう。

# 退職なさる先生方から

## ◆されど四年

芸術学講座教授

大橋 良介

四年まえ、芸術学講座に来るよう慫慂されたときは、少し迷った。五年間を「サイクルとする大学院授業を担当するのであれば、定年までに残された任期では一巡に満たない。「でも学部四年はカバーできますよ。それに博士課程は三年です」と、後に同僚となる上倉教授の、例のごとく神父さんもどきの弁舌に、ついその気になつて招聘を受諾することとした。

あれから光陰矢のごとし。暦どおりに定年が来た。「十年一日」からすると、半日たらず。しかし「石の上にも三年」ならぬ「待兼山の上にも四年」。わずか、と言うべきか、されど、と言うべきか。回顧して感傷に浸る暇はまだ与えられていないが、御礼の言葉は胸中に山ほど詰まつて二杯だ。そのうちの数行ほどを記す時間は、たとえ無くとも作らなくてはならない。(いま、ベルリン行きのルフトハンザ機内で書いています)。

芸術学講座は、建物に関しては、構造壁の亀裂で雨漏りすら起こる、崩壊危険度が学内随一の、且つ非・美学的という点で傑出した老朽ビルだ。しかし学生諸君は、みな个性的で優秀で性格の良い連中ばかり。芸術学講座だけの現象かとも思ったが、「もぐり」の諸君がいつも何人か居たから、他講座・他学部でも共通

する阪大現象なのかもしれない。「いや、二十年前は、もつと優秀でしたよ」と、天野研究科長が「もつと」というところを強調して述べられたから、そうなのだろう。だが現在でも、彼らの知識欲と真剣な受講態度が醸し出す「熱気」は、私の授業意志を支えるに十分なものであった。学生参加方式（プロトコル方式）の授業は、教師と学生の合作として本年三月に刊行される（『芸術学講義プロトコル。美のゆくえ』、燈影舎、三八〇〇円）。自分のこれまでの刊行物のなかで、いちばん嬉しい気分だ。これに、毎年の二泊ドンチャン・ゼミ旅行、野球大会（老骨のピッチャー、四番打者に、彼らは猛打賞をくれました）、石橋界限での飲み会、研究棟での牡丹鍋パーティ、四月の花見会と秋の紅葉狩り。学生諸君から

貰った「時」に、心から感謝したい。

教員の皆さんと事務室の宮原さんには、足を向けて寝られない。法人化して激動のサバイバル競争に入った阪大も、ご多分に漏れず、皆の学問研究の時間をむしり取る学内業務が、山積みだ。農繁期と正月と葬式が一度に来たような文学研究科で、実務無能の年配教授は周囲から労って頂いて、研究教育に専念して学究の日々を過すことが許された。十年ほど持ち越してきた仕事、著書二冊、訳書一冊となつて片づいた。そのしわ寄せがどこへ行ったかは、迂闊な私でも見当はついている。あまり役に立たなかつたのは実に申し訳ないが、不祥事つづきの阪大にあつては、事件を起こさずに去ることだけで、ささやかな功績と見なして頂けるかどうか。皆さん、心から、ありがとうございます。

過去形は良くない。四月からも別処で大学人をつづけますので、今後とも宜しく願います。



大橋 良介  
1969年京都大学文学部哲学科卒業、  
1974年ミュンヘン大学哲学部哲学科博士課程学位取得、1983年ヴェルツブルク大学哲学教授資格取得。ミュンヘン大学、京都工芸繊維大学を経て本学文学研究科着任。『聞くこととしての歴史—「悲の現象論 歴史篇」—』(2005)

## ◆ 比較文学研究室の創生期



韓国での学会後の懇親会

文学を専門的知識として持ち、それを教授することは到底不可能だろう。受け身かもしれないが、誰がどこから来て、何をやりたいか、そうし

た状況を見て、それに合わせながら運営・指導を続けていくしかない。このようにして徐々に比較文学研究室の歴史が動き始めたのである。しかし、物事が進み始めるとなかなか面白い研究室である。まず私自身が、日々たえず新しい知識に出会うことになる。アジアに関する情報は、まだ知らないことが多い。素材も知れないが、自分が学生になってもう一度何か勉強してみたいという気持ちが大いに刺激されるのである。いろいろな繋がりもできてくる。タイや中国などに日本語や日本文学を教えに行く院生も出てくる。こうした行き来がもたらす増え、蓄積が増えれば、いよいよ「縁」が生まれる場となるだろう。研究室が活動を始めてからちょうど十年が経った昨年の十二月、ソウルの韓国外国語大学校と共同研究会を開いた。外国語大学校の崔先生、阪大の鈴木助手をはじめ若手の研究者たちの尽力で会はずばらしいものだったが、韓国内の「昔」の修了生たちも集まり、この十年間の幸福を感じることができた。もちろんまだおぼつかないところは数多くある。でもやはり創生期はいいものである。

(内藤 高)

研究室今昔という欄であるが、まだまだ「昔」の無い研究室である。実質的な活動を始めたのは一九九六年度からであり、私は九六年十月に唯一人の教授として他大学から着任したが、同年の四月既に唯一人の学生が三回生として進学していた。二対一の体制としてスタートして、ちよほど十年が経ったところである。大学院博士課程入学の第一号は、韓国からの留学生だった。島崎藤村と韓国の自然主義作家廉想渉(ヨム・サンソップ)の比較研究で論文を書きたいという。もともと日仏の近代文学や、絵画と文学の相互交渉を基本テーマとしてきた筆者は、シングルもできず、韓国文学についての専門的知識も持っていない。途方に暮れたが、それでも「比較」文学についての論文指導を開始するしかなかった。その後も、東アジアを中心に留学生はコンスタントに入学してくる。ある意味では仕方がないと覚悟を決めた。世界の言語、世界の



日韓国際学術交流フォーラム

## ■ 研究室今昔 ■

## ◆ 阪大音楽学の三十年



研究室主催のレクチャーコンサートの光景

が入学したのは九八〇年のことなので、創設当初の一番熱気に満ちた時代伝説として聞くかぎりではとんでもないことがいろいろ起こっていたらしい)は経験していないが、その後は音楽学研究室に出入り入ったりしながら過ごしてきた。その間に見聞きした範囲で、この研究室の変化をスケッチしてみよう。

まず、一番大きく変わったのは、研究の出身だろう。最近の学位論文は、ポピュラー音楽や現代の音楽現象を文化研究的な視点から切り取る、といったものが多いが、私の入学当時、ポピュラー音楽で卒論を書くことは、まだかなり勇気が必要だった。また、明治以後の日本の洋楽受容についての研究は、ずいぶん盛んに行われるようになったが、これも当時は珍しいテーマだった。その代わりに、昔は主流であった作曲家研究、作品研究、あるい



ミハエル・シュトゥヴェ博士の講演

はフィールドワークに基づく民族音楽学的研究は、ずいぶん少なくなった。これは阪大ばかりではなく、音楽学一般の潮流ではあるが、阪大の音楽学研究室は、その潮流をむしろリードしてきたと言える。

一方、変わらないのは研究室のまわりの物理的環境である。今も昔も芸術諸学の研究室がある美学棟(というのには通称かもしれないが、私は正式名称を知らない)は、豊中キャンパスの中で、外見が変わらずに残っている数少ない建物の一つである。ロ号館は建物としては、一番古いだろうが、一度リニューアルされて改革後の東欧の古い建造物のように妙に生々しい色になった。文学部本館も昔のままだが、これは近い将来改修されるとの噂だ。そして、教授1、助教1、助手ときどき1、というスタッフも変わらない。この陣容で、当該分野では未だに唯の文学研究科に置かれた研究室として、存在感を発揮し続ける、というのが、阪大音楽学研究室の変わらぬ使命である。

(伊東 信宏)

## 二十二歳の夢と憂鬱

河合 知子

演劇講師をさせていただいている文  
化学院では、今年も卒業公演の稽古が  
始まっています。中心となってがんばっ  
ている卒業生は二十一歳。毎日彼らとの  
濃密な時間を過ごす中で私自身のそ  
の頃はと思いつくと、学問より何より、  
やはり演劇活動にまっしぐら：何もわ  
からずただただ楽しかった新入生の頃  
とは違って、まがりなりにも自分の考え  
を持つようになり、先輩たちに生意気  
な意見をぶつけては認めてもらえず憤り、  
理想が今すぐ実現しないことに焦り、  
イラつき……自分なりの夢がふくらむ  
と同時に、憂鬱に落ち込むことの多い、  
なんともままならない青春時代でした。  
大学入学と同時に劇団に入っており、  
うど二十年、今なお演劇を続けている  
自分がふと不思議に思えます。



河合 知子(阿藤 智恵)  
1991年文学部日本学科卒業  
戯曲『ゼノン・ド・メゾン〜メゾン・ド・  
セン』平成13年度文化庁舞台芸  
術創作奨励賞佳作、小説『空と丘  
の間で』せたがや文学賞二席、戯  
曲『中二階な人々』平成14年度文  
化庁舞台芸術創作奨励特別賞

何度もありま  
した。そのた  
びになんだか  
んだと屁理屈  
をつけ、未練が  
ましく続けて  
いる間にこう  
いう講師のお  
仕事などもきて、なんとか生活ができ  
るようになり、演劇を始めた頃の自分  
と同じ年頃の学生たちと共に芝居を  
している……。不思議です。そして、感  
謝です。今では彼らがどんなに暗く落  
ち込んで、「なんでそんなに元気がない  
の？」と笑い飛ばし、毎日笑って楽しく  
稽古して……するように、心がけてい  
ます。

## 卒業生近況

### 「イカハン」であること

川島 伸博

自分が大学  
に在籍した頃  
は、阪大との  
合コンが近隣  
の女子大から  
「芋掘り」と  
呼ばれていた。  
結局、「合コン」

なるものを経験することなく卒業したが、  
あのとき感じていた「イモ」扱いされる  
ことへの憤懣やる方ない思いは今も覚  
えている。

英文科を卒業して大学院に入学、そ  
のまま近隣の私大に英語教師として就  
職、今でも阪大から徒歩五分の所に棲  
息し、時間があるとキャンパスを散策し  
たりする。気付くと待兼山界隈で活動  
すること十六年、阪大生の雰囲気も随  
分変わった。

数年前、館下食堂で暇つぶしに読ん  
でいた阪大生主催の広報誌に面白い記  
事があった。「イカハン」という言葉は元来、  
冒頭に挙げたような「イカ」にも「大生」  
を指していたが、今世紀に入った辺りか  
ら阪大生のイメージも変わり「イカし  
たハン大生」を指すようになったという。

確かに阪大生の見栄えは驚くほどよ  
くなった。しかし、有標にはしばしば否  
定的ニュアンスが伴う。僕らの時代に「勉  
強しか能がなく甲斐性のないダメ学生」  
を意味した「イカハン」、このレッテルが  
ファッショナブルな阪大生に向けられる  
ようになった背景には「格好ばかり気  
にして勉強しないダメ学生」が増えて  
きた事情が見え隠れする。

職場に限らず、出身校がばれるとい  
ろいろな所で「いかにも」と言われてし  
まう自分だが、ファッション・センスがあ  
がったとは到底思えない。残念ながら「イ  
カハン」の意味的变化はあくまでも阪  
大内の現象、社会的には市民権を得て  
いないようだ。すると自分はやっぱり「イ  
モ」だということを認めることになるの  
だが、あのルサンチマンはどこへやら、今  
は「イカハン(＝イモ)」扱いされること  
を誇りにすら思っている。



川島 伸博  
平成7年(1995年)大阪大学  
文学部英文科卒業  
平成9年(1997年)同大学院  
文学研究科修士課程修了  
平成16年(2004年)文学博士  
現在大阪学院大学経営科学  
部助教

## 大阪大学同窓会連合会にもご入会を！

一昨年七月二十五日、天神祭の船渡御にはじめて参加した「阪大船」の船上で大阪大学同窓会連合会の発会式が行われたことは、すでにご存知の方も多いかと思えます。会長には 熊谷信昭氏（元大阪大学総長）、副会長には金森順次郎氏（元大阪大学総長）と松本圭史氏（大阪大学名誉教授、元医学部長）が就任しております。

従来の部局毎の同窓会は堅持しながら、連合会としては個別の同窓会組織間の相互交流・連携を強化することによって、それらの更なる充実に資することを目的としています。従って、連合会の正会員となる入会資格は、部局同窓会の会員であることを原則としています。（ただし、所属する部局同窓会がない教職員及びOBは、連合会だけの正会員になることはできません。）

連合会は具体的には、新たな地域同窓会及職域同窓会などの各種同窓会設立のバックアップ、阪大卒業生のネットワークの整備・拡大、卒業生と大阪大学との連携の強化などによって、大阪大学の充実・発展を支援し、特に在校生に対する強力なサポート組織となることを目指しています。

文学部・文学研究科同窓会からは、石原会長が連合会幹事として運営に参画しています。大阪大学ホームページに、大阪大学同窓会連合会のホームページもリンクを張っています。ご覧になってください。

なお、文学部・文学研究科同窓会と連合会は連携しておりますが、基本的には別組織として独立しておりますので、両方にご入会して頂きたく、皆様のご理解とご協力・ご支援をぜひお願いする次第です。



## 事務局便り

### お知らせ

◆二〇〇七年度版 同窓会名簿について  
現在『大阪大学文学部・文学研究科卒業生・修了生名簿』（二〇〇七年度版）を製作中です。刊行予定は平成十九年六月下旬です。制作を委託している（株）サラトの方から、皆様のもとにデータの照会、ならびに購入のご案内が届いているものと存じます。ご協力方、よろしくお願ひ申し上げます。名簿に関するお問い合わせは、0120-917-962（サラト）、もしくは大阪大学ホームページにリンクしております「文学部同窓会ホームページ」を通してメールにてお願いいたします。

◆事務局メンバーが替わりました。  
事務局長：入江 幸男（S五十二）  
総務：渋谷 勝己（S六十二）  
会計：村田 路人（S五十二）  
企画・立案：和田 章男（S五十五）、三谷 研爾（S五十九）  
広報・服部 典之（S五十六）  
アルバイト職員：武内 正美（H十二）

### お願ひ

◆住所変更について  
住所変更の際には必ず同窓会事務局までご報くださいませ。その際に名簿への住所、電話番号等の記載を希望されない方はその旨承ります。  
◆終身会費お支払いの願ひ  
大阪大学文学部・文学研究科同窓会は終身会費制です。お支払いがまだの方は先の郵便振替口座にお願ひいたします。お支払の有無が確認できない方は事務局までお問い合わせくださいませ。

□座番号 0940179043  
加入者名 大阪大学文学部同窓会事務局

### 募集

◇『ニューズレター』の「卒業生への近況」への投稿を募集しております。  
ご自身の写真一枚と六百字程度の原稿を事務局までお送りください。  
◇同窓会の名称を募集しております。採用者には図書券二万円分を贈呈。  
ご応募くださった皆様ありがとうございました。新たな名称のご提案、これまでの候補に対するご意見等ございましたら事務局までお知らせ下さい。

●住所：〒560-0853 豊中市待兼山町一番五号  
●ホームページアドレス：http://www.letosaka-u.ac.jp/dousou/  
●事務局メールアドレス：dousou78@let.osaka-u.ac.jp